

池内 紀著 『ニッポンの山里』

著者の本業はドイツ文学者であるが、文明批評などのエッセイストとしても知られている。その語り口は恬淡としているので読んだ時には余り残響がない。しかし、忘れた頃になってジワジワと心に沁み出してくるからタダモノではない。山関係の著作は殆ど出版されていないが、「山の本」や「山と溪谷」などに山のエッセーや書評が連載されているので、読まれた方も多いと思う。

私はドイツ文学などという高尚なものには全く縁が無いが、辻まことの肖像を綴った同じ著者の『見知らぬオトカム』（1997年、みすず書房）を読んだり、雑誌に載った随筆や座談をめぐったりしている内に著者の書いたものが何となく気に掛かるようになっていた。

この本は、日本の山奥にひっそりと佇んでいる山里集落を、東は青森県西目屋村から西は愛媛県千町まで全国30ヶ所を訪ね歩いた紀行文で、数年前に白山書房の「山の本」に連載されたものがこのたび一冊に纏められたものである。いずれの山里も、我々登山者には親しい山々のアプローチやドン詰まりにあるので、かつて通った山里がどのように変わっているのかいないのかなど興味深く読めるが、著者がこれらの山里で立ち寄った鄙びた一膳飯屋のメニューには無い「ご当地名産〇〇和牛ステーキ」や「日本一の清流に育った天然鰻の蒲焼と鮎の塩焼き」の味などを期待してはいけない。この本に書かれている味は、お婆が漬を垂らしながら夜なべに漬け込んだ山菜の漬物やお爺が皺しわの手で打った粗末な掛け蕎麦の味であって、忘れた頃になってジワジワと心に沁み出してくるのである。

何処の山里でも、かつては鉱山、材木、牛馬、山岳講などで賑わったであろうが今では鄙びてしまって、お役所は住民の流出防止と観光客の呼び込みのために「カルチャーセンター」やら「郷土伝統芸能館」やら「エコツアーセンター」やらのハコモノ作りに熱心ではあるが、急激に消え失せつつある山里共同体としての人々の繋がりや情念、風土と歳月に磨かれた山里の暮らしなどは役所の机の引出の中で忘れられた反古になっているらしい。「ステーキの味」に例えたのは前者、「お婆の漬物」は后者である。

30箇所の中には、かつて秘境と言われた長野県遠山郷、徳島県祖谷、山梨県奈良田などの伝統的な秘境の過去と現在の姿の描写もあり、また一方では、きだみのるの「気違い部落」の舞台にもなった東京都八王子市の恩方という“都会”も登場する。ここは高尾山、陣馬山や景信山の近くであるので或いは行かれた方もあろう。かつて維新の元勳と言われた山縣有朋や大山巖などの貴紳達が原野を開拓して広大な農場を開いた那須塩原の夢の跡や、宮澤賢治や高村光太郎が移り住んだ岩手県の早池峰山麓も登場する。

著者の手になる挿画も楽しく、ほのぼのとした想像が広がる。山里の風景写真も挿入されていて日本の原風景を彷彿とさせる。しかし、これらの山里に著者が溶け込んでこのエッセーを書いたことを強調したかったのか、或いは逆に山里の外から鳥瞰したこと強調したかったのか、いずれにしても風景写真の中に著者の姿が写し込まれているのは些か臥龍点曇であろう。

山と溪谷社 2013 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

